

神への問い

著者	原口 尚彰
雑誌名	大学礼拝説教集
号	16
ページ	89-93
発行年	2012-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024507/

「神への問い」

総合人文学科長 原 口 尚 彰

ヨブ記、第三一章三五～四〇節

³⁵ どうか、わたしの言うことを聞いてください。

見よ、わたしはここに署名する。

全能者よ、答えてください。

わたしと争う者が書いた告訴状を

³⁶ わたしはしかと肩に担い

冠のようにして頭に結び付けよう。

³⁷ わたしの歩みの一歩一歩を彼に示し

君主のように彼と対決しよう。

³⁸ わたしの畑がわたしに対して叫び声をあげ
その畝が泣き

39 わたしが金を払わずに収穫を奪つて食べ

持ち主を死に至らしめたことは、決してない。

もしあるというなら

40 小麦の代わりに茨が生え

大麦の代わりに雑草が生えてもよい。

旧約聖書のヨブ記は、義人ヨブの苦難を記した書物で、神が創った世界の中で、罪のない人間が何故苦しい目に遭うのかという主題をめぐる長大な戯曲となっています。ヨブは元々大変敬虔な人物で、神を敬い、悪を避ける生活を送っていました。一章二節の記述によると、ヨブには七人の息子と二人の娘があり、しかも、羊やらくだや牛やロバを沢山所有する富豪であり、何一つ不自由のない生活を送っていました。ところが、天上で神とサタンが一つの賭を行ったことで状況は一変します。サタンは神に対し、利益がないのに人が神を敬うことがあるだろうか？ヨブが神を敬うのは、神の祝福にされて財産を与えられているからであり、財産が奪われれば、神を呪うに違いないと言います。神はサタンにしたいようにするが良いと言うと、サタンは、災難をヨブに下し、ヨブの財産を奪い、子供たちを死なせました。しかし、ヨブは、「わたしは裸で母の胎

を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」と言って、神を非難することなく、運命を甘受しました（一・二一）。

次に、サタンはヨブに重い皮膚病を送りましたが、それでも彼は、「わたしたちは、神から幸福もいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。」と言って、神を呪うことをしませんでした（二・一〇）。

ヨブの災難を聞いて、エリファズ、ビルダド、ツォファルという三人の友人が慰めるために遠くからやって来ます。この三人の友人とヨブの交わした対話が、ヨブ記三章から二八章までの内容となっています。友人たちは、ヨブの運命に同情していましたが、神は正義を嘉し、不義を罰するという伝統的な勧善懲惡の考え方に立っていたために、ヨブがこれ程の不幸に見舞われるのは何か大きな罪を犯しているに違いないと考え、ヨブに対して罪を隠さずに認めるように善意から勧めます。しかし、ヨブには全く身に覚えがないことなので、友人たちに反論することになり、両者の間に激しい論争が起こります（ヨブ記二九―三〇章）。結局のところ、友人たちはヨブを説得することが出来ないで、黙ってしまいます。友人たちを言い負かしたヨブは、最後に神に対して激しい調子で問いかけます。先程読んだ箇所はその結びのところですが、そのポイント自分は一切不義を働いていないのに、神は何故災難を下すのかということです。ヨブ記の末尾において、

神が顛れて来て神の全能と人間の知識の限界を強調すると（ヨブ記四〇・一一—四一・二六）、ヨブはひれ伏し、神を非難することを止めるので（四二・一一—一六）、ヨブの提起した神への問いに対する直接の答えは明確な形では与えられないままに終わります。ヨブ記を含む旧約聖書全体が開かれた問いの書を言っても過言ではないでしょう。

さて、神が創造した世界において罪のない者が何故悲惨な体験をしなければならないのか？ということは、繰り返し問われて来ました。今回の大震災においては、一万五千人以上の人々が犠牲になり、四千人近い人たちが行方不明となっています。生き残った人たちの中には、家族を失い、家を失い、工場や商店を失い、身よりも財産もなくなって避難所に身を寄せて数ヶ月を過ごした後、仮設住宅に住んでいる人たちがあります。被災した人たちが、被災しなかった人たちよりも罪深かったかという、勿論、そのようなことはなく、住んでいた地域が震源地に近かったり、海岸沿いで津波の影響を直接に受けるところであつたりしたに過ぎません。災害という自然現象は、人間の倫理的資質に関係なく襲つて来るものであります。特に、今回の震災において甚大な被害をもたらした大津波は、繁栄を謳歌する大都市ではなく、北太平洋沿岸部の漁港や農村を襲つたのであり、自然と共生して生活していた人々が被災しました。自然は人間に対して恵みを与える反面、時として、牙を剥いて人間の生活を破壊することもあることを、今回の災害は示しました。

大災害は不道德な人間や、繁栄に酔いしれて驕り高ぶる人間を懲らしめるために神が下した罰であるというような震災天罰論が、今回の大震災にあたっても保守派の一部の論客たちによって唱えられましたが、妥当ではありません。

しかし、全能の神が創造主であり、世界はすべて主の御手の内にあるのなら、何故このようなことが起こるのか、罪ない人が被災し苦しむのはどうしてなのかという問いは、ヨブに限らず人の心の中に絶えず生じて来ます。実際に同様な問いを東日本大震災に関して、日本に住む少女がローマ教皇に問うたところ、教皇は率直に自分も同じような疑問を持っていると述べました。良く考えてみると、この問いは、「エロイ、エロイ、レマサバクタニ（我が神、わが神、何故わたしをお見捨てになったのですか?）」という十字架上のイエスの問いでありました（マルコ一五・三四）。神の子であり、罪を犯したことのないイエスが、何故、捉えられ、拷問を受け、断罪され、極悪人のように十字架刑を受けなければならなかったのか?ということは大きな謎であり、不条理でありました。それは、人類の罪を負うイエスは、不条理な苦しみの中にある人間と共に歩み、その苦しみを共に担い、共に問い続けて下さるということに他ならないと思います。「悲しむ人々は幸いである。彼等は慰められるであろう」（マタイ五・四私訳）という主イエスの言葉を頼りに歩んで行きたいと思っています。